



新編  
仮面  
R18





注意＊この本は紅雀受合本です。非公  
紅雀同士、この本は紅雀受合本です。非公  
苦手な方は閲覧を遠慮ください。内容は非  
公式CPなので

紅雀受合本  
仮

も く じ

# 目次

M O K U J I

錫宮蘭  
p5 ~ p10

灰賀  
p11 ~ p18

まつ  
p19 ~ p20

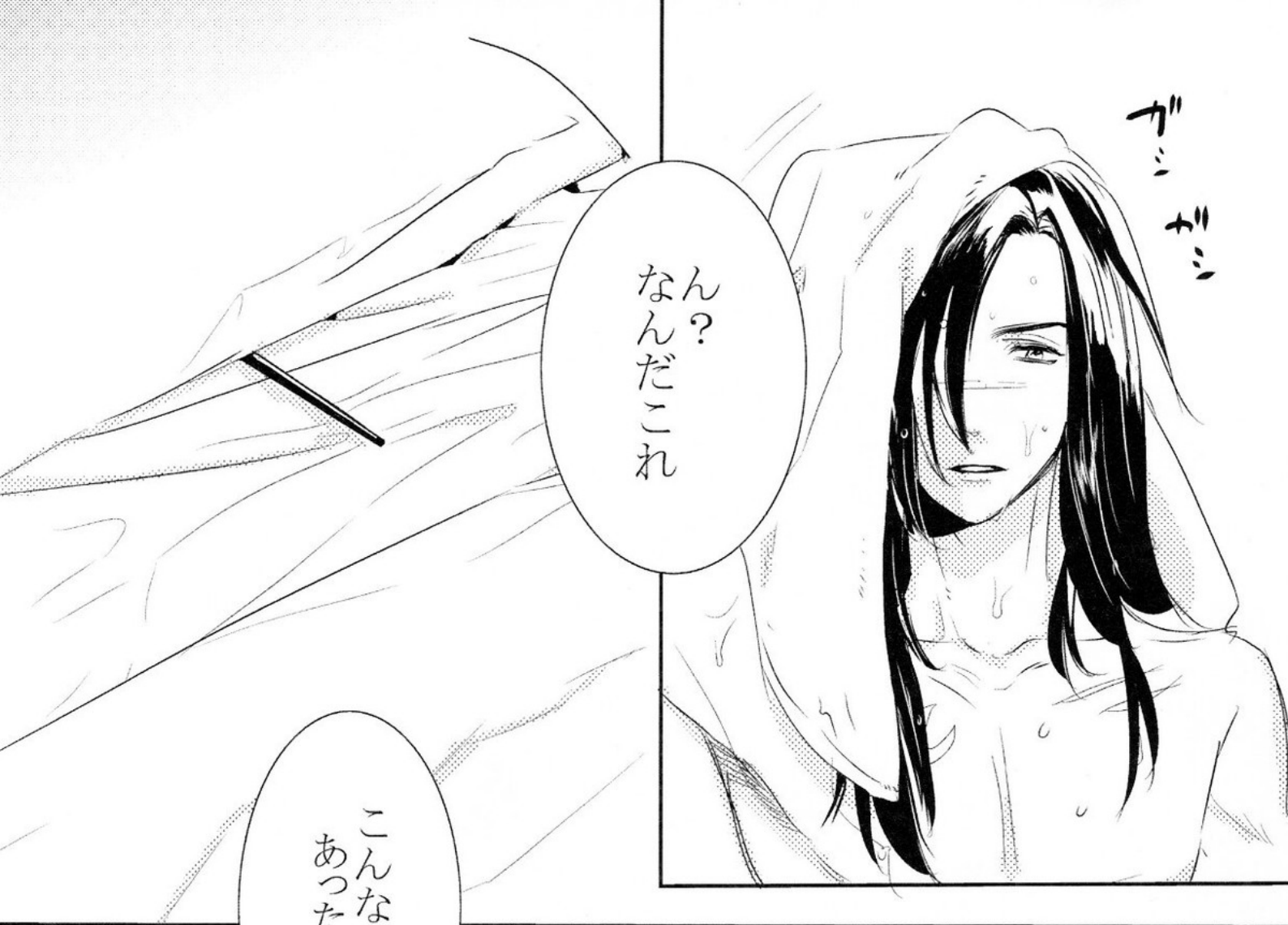
hiki  
p21 ~ p28

ナルカ  
p29 ~ p36

アオキムツミ  
p37

東吉彦  
p38 ~ p44

コメント  
ページ  
p45 ~ p46



なん?  
なんだこれ

ガ  
ガ  
ガ

こんなの  
あつたかな



あれ  
これって.....

ん?

華かおり  
きみは咲く

錫宮 蘭



なんで  
これ忘れてく  
んだよ

アイツも  
抜けるトコ  
あんだな…つか、

つか、アレした  
後に会いに  
いくの気まずいな

あ



ミンク！

…なにしに  
来た

あ…

おい！  
紅時雨のヘッテ



てめえ  
ミンクさんに  
なに因縁つけに  
来たんだ？ああ？

はあ？  
誰がいつ  
因縁つけたっつーん  
だよ！

ミンクさんに  
何かしたらシメッぞ  
ゴルア！

まだ  
なにもしてねーだろ

ギョ  
ギョ

うるせえぞ  
テメエら

騒ぐなら  
よそでやれ

あとお前

おお  
う！

おまえは  
こつちにい

ああ

あ…

またヨイツから  
オイがする…

あの時と  
同じにおいだ





あ

ああ、  
これなんだが

…で、  
なんの用だ



野郎には  
興味ねーのに…

ついうっかり  
酒の勢いでヤツちまった  
んだよな…



もう忘れんなよ

つうか  
枕の下に置いてく  
つて、どこの女子だ  
オメーわ

…



うちに  
置いてったろ

大事なモンかと  
思ってたよ

…



わざわざ  
このためだけに  
ココに来たのか



そうか、おれは  
てつきり

ニヤニヤ



昨日の続きが  
してえのかと思つて  
たぜ

はあ？

野郎には興味  
ねえが

強引にされるのは

嫌いじゃ  
ねえんだろ



あ……

ハハハハ



わあー

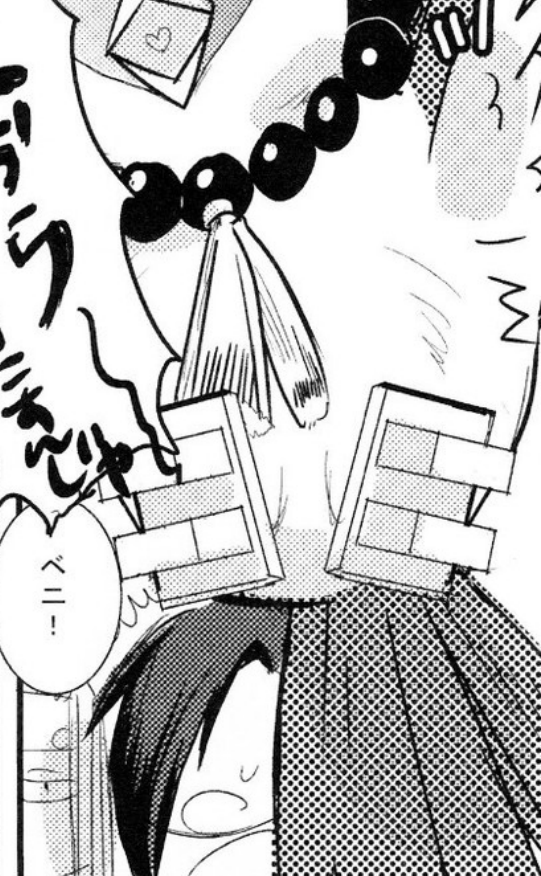
ムニッ!!



あっ

ひびく

おい、ヒヨロ!  
空気を読め



ハニッ

ハハハハ

紅雀

蓮の恩返し / 灰賀

話があるんだ

ん？

どうした？

紅雀にはいつも  
ご馳走になったり  
髪を切ったりして  
もらって世話に  
なっている

正座して  
改まったりして

真剣な話は  
正座で、と相場が  
決まっている

お、おう？

そんなの  
気にしないでいいぞ

そうはいかない  
それでなくても紅雀は  
髪結い師を生業にしてる  
のだから対価は支払わ  
なければならぬと思

でもな…

お前小遣いも  
そんなにももらって  
ないんだろう？

そんな奴から  
取れねえしよ

そうだな…  
だから



ベッドに

横に  
なっ  
てく  
れ



ガ

だから

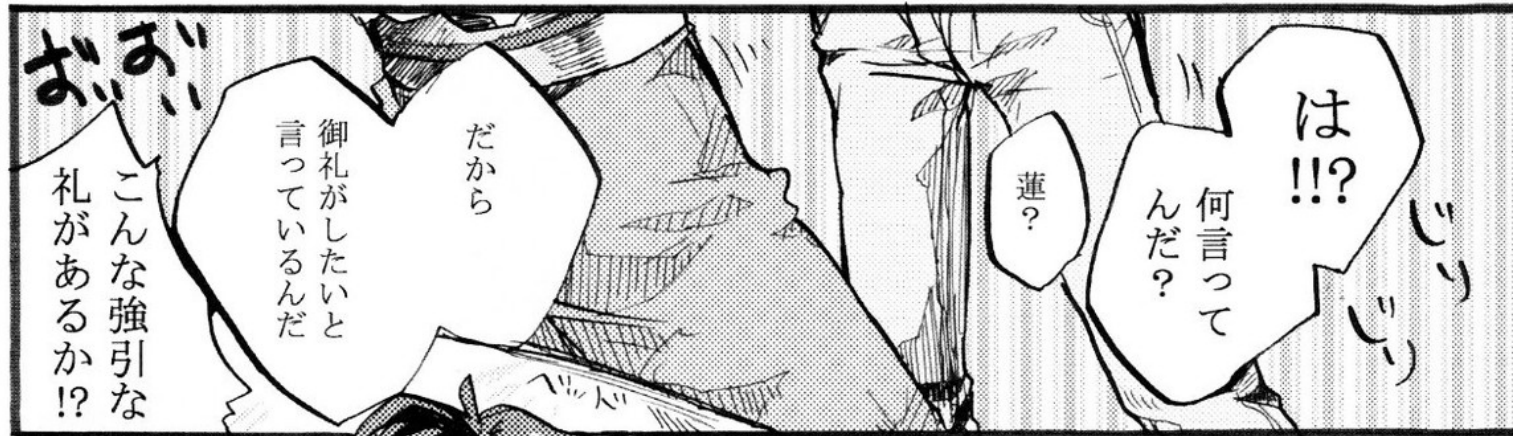
紅雀



体で払おうと  
思うんだ

カ  
カ

おま



おま  
こんな強引な  
礼があるか!?

だから  
御礼がしたいと  
言っているんだ

蓮?

は!!?  
何言っ  
て  
んだ?



カ  
カ

!

カ  
カ

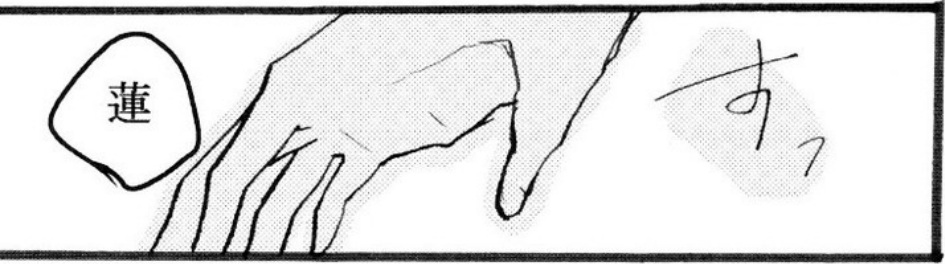


冗談だよな

おい



ギン



蓮

す



!

もみ



どうだ？  
気持ちいいだろうか？

…おう

なんだ  
マツサージか？  
驚かせやがって



もみ

もみ

もみ



ん？



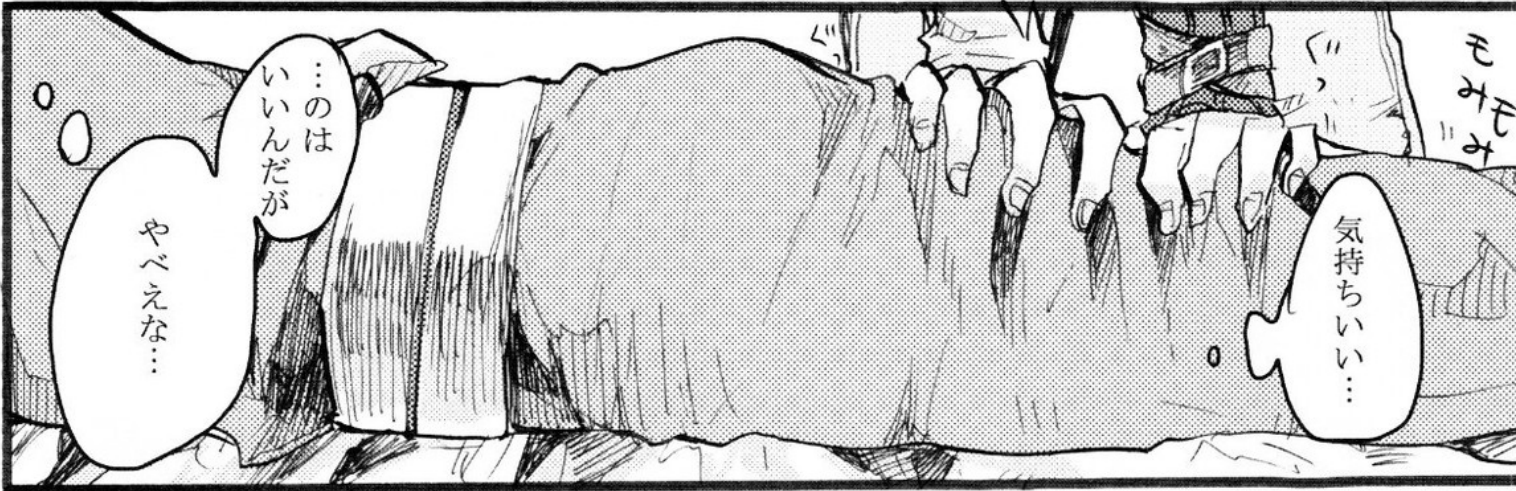
それにしても世辞抜きで  
気持ちいいわ：寝ちまいそう



ああ  
マッサージには  
自信がある

最近蒼葉から  
タエの肩もみ係を  
引き継いだ

そんな係りが  
あるのか瀬良垣家



…のは  
いいんだが

やべえな…

気持ちいい…



次は仰向けに  
なつてくれ

ん、あー  
今ので十分  
解れたからこれで  
いいぞ  
ありがとな



そういやここんとこ忙しくて  
そっちの世話になつて  
なかつたからなあ：

相手が女じゃなかった  
だけマシか：

情けねえ：

紅雀



勃ってきちまった：



は…



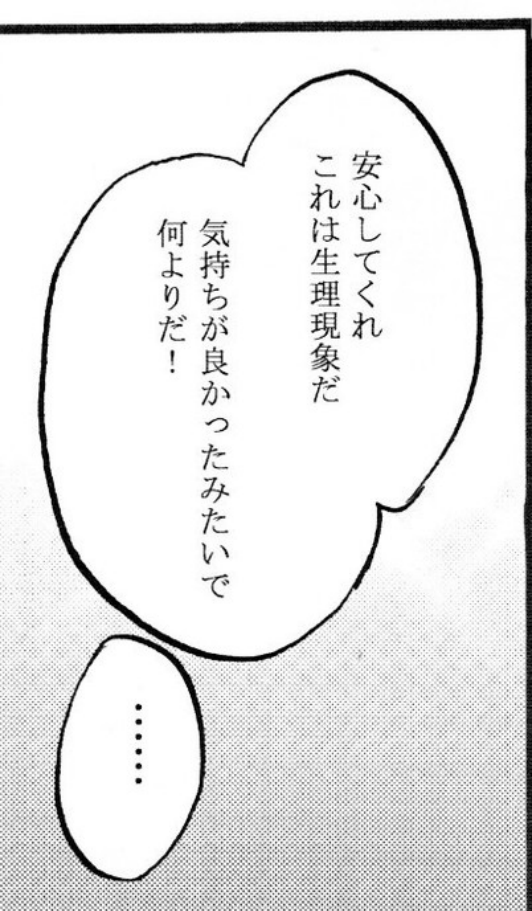
だめだ、これでは  
札には足りない

紅雀の全身の  
凝りを解すまで



……

……



安心してくれ  
これは生理現象だ

気持ち良かったみたいで  
何よりだ！

……



んなこと言われなくてもわかってんだよ！

紅雀…  
どうやら勃起している  
ようだが…







蓮、そもそも  
こういうことはな

男女でやるもん  
なんだ

お前人になつてからそんな  
経つてないから分からないかも  
しれないけどな

わかった

嫌だったら目を瞑って  
女性が相手だと思つて  
いてくれ

カ  
ソ  
!



そういう問題じゃ  
ないってーの…

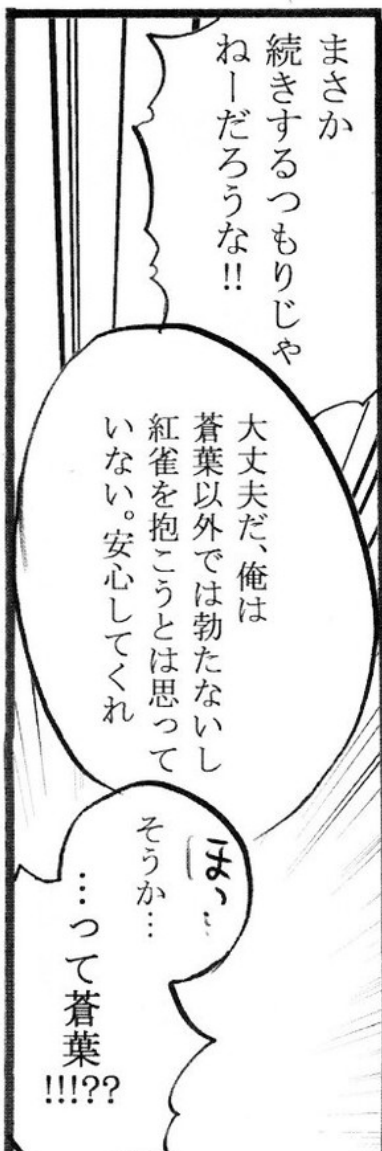
全然わかつてねえな…



あ、でも  
そろそろ…



男にしゃぶられるとか…  
どんな状況だよ





# 紅雀さんが 猫になった まつ







は...

な...

え...?

しかも



...よお

俺がいた

夜寝苦しくて  
目が覚めたら



どうい...  
状況だ...?

こりや...

ソイツに  
掘られてた

# 出たところ勝負

ヨミカライズ紅雀×ゲーム紅雀

しんじ



この顔...



やっぱり俺...だよな

はな



はなせー

気付いたら  
こうなってたんだよ...!

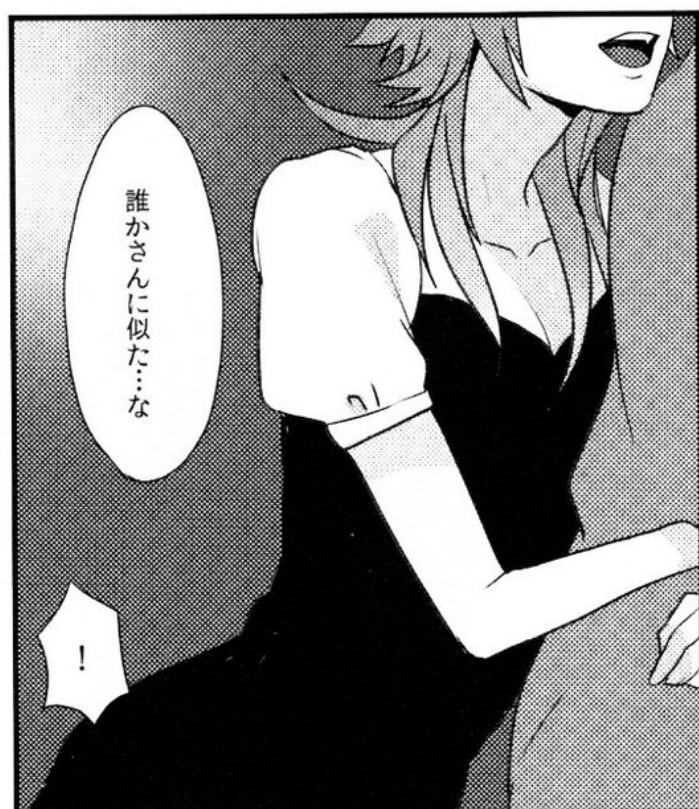
てめーこそ  
シめんな...!



近エ!!

うあつ...  
くっそ

何でもいい...っ  
つんで俺は  
ケツ掘られてんだ...!



誰かさんに似た...な

!



てめえ...

手は出しちゃ  
ねーよ...

てめーが俺なら  
分かんたら



...俺だつて今日は  
ミズキンところで飲んで

帰りにお嬢さんを一人  
送ったわけよ



最近色々  
ごたついてたからな

それでこんな  
おかしな夢  
見たんだろうが…

夢…なのか  
これ…?

それ以外  
何があると思う?



割とこの寸止め

夢でも辛いんですが



は…っ?



自分を犯す夢だぜ?

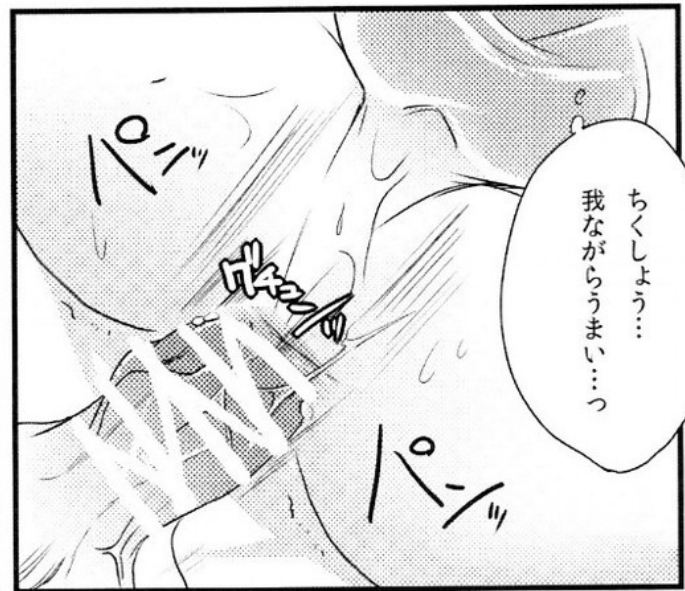
…俺は犯される側だけだな

ギギギギ

とろろ

はよ抜け







でも  
Hシリーズは  
入れてねーのか

んー？  
そこら辺は違うのか…

!?

!?

部屋とかは  
そのまんまなんだがなあ…

は？ナノ…？

しゅい



この「俺」も  
同じだ

は？



そう思うだろ？

ここまでリアルだと  
なんか気味わりいな

…その刺青を見て  
不覚にも気付いてしまった

しゅる



いつまでも  
逃げられないのも  
同じ…か

いてエッ

…んだよ



は？



…何でもねえよ  
早くいつちまえ

ええええ



こんな夢…きつと  
朝には  
忘れちまうだろう



逃げたって  
いいじゃねえか

セクッ

それまでくらい



147

全部…

朝…  
夢か…

つたく…  
とんでもねえ夢だよ…  
我ながらな



……え？

ホロッ



全くだ…  
口が裂けても  
自分とセックスする夢  
見たんざ…

一番古い記憶は暖かな日差しの中、ゆりかごで昼寝をしてい  
る時に母から言われた言葉だった。

『紅雀、この事は誰にも知られてはいけない。心にそつと塞い  
で隠して、無かった事にしなけりやならない』

それは物心がついて初めての約束だった。

誰にも知られてはいけない秘密を、母は何事もなく振舞うこ  
とで隠し通していた。

跡継ぎとして産まれた我が子の未来に支障があつてはならな  
い。明るみに出れば、どんな仕打ちを受けるか分からないのだ  
から。

けれどその秘密は暴かれる。

一族の直系に誕生した紅雀は、由緒ある組にとって重要な跡  
継ぎである。

そのことに弊害がある“無かった事”を――。

オーバータワーが崩れたあの日、紅雀は最愛の人を得た。

紅雀が犯した罪を知った上で、傍にいてくれる幼馴染にして  
大切な人、蒼葉である。

澄んでいた空は気温の上昇と共に円やかにけぶり、木々は総  
やかに緑を纏う春。紅雀と蒼葉は二人きりで本土にある紅雀の  
実家に来ていた。

「静かだな……って当たり前か」

紅雀の実家は誰も住んでおらず、煤けた屋敷のみが残るだけ  
だった。

凄惨な事件現場となったこの場所は、とつくに無くなってい  
てもいいはずだったが誰も手を着けようとしな。蔵を含めた  
広い家屋敷を解体するには、それなりの費用が掛かるからだ。

今や、組自体機能していない。紅雀が組を去った後で、長年  
の仇敵であった別の組との抗争に負けてしまい、どさくさの中  
で親族の消息は絶えている。おそらくは秘密裏に殺害されたの  
だ。その後は飴に群がる蟻の如く、分家達に家財を食い潰され  
た有様で、この土地を売るにも更地にするにも難しい状況にな  
っている。

棄てられた屋敷と自分はよく似ていると紅雀は思う。

事前に管理者である分家に連絡を取ろうとしたところ、全く  
電話が繋がらなくなっていた。

一切の関わりを断られたわけだが紅雀は悲観していない。

寧ろ、気兼ねなく蒼葉と生きて行けるのだから万々歳だった。

「権力が無くなればこんなもんか」

強面の男たちが大股で歩き、女中達が静々と傳っていた昔が  
嘘のようだった。

柔らかな日差しが降り注ぐ縁側で、紅雀は両腕を伸ばす。

背後から屋敷の広さに燥ぐ声が響く。春先の気怠さなど感じ  
なさせない元気な恋人に紅雀は苦笑して振り返った。

「あまり奥まで行くなよー。広いから帰って来れなくなるぞ」  
不満げな声を聞きながら、縁側の埃を払って座る。

人の住まなくなった家は荒れるもので、襖は破れ、畳は綻び  
カビ臭い。二人が訪うまで長年に渡り、換気どころか清掃すら  
されていない。幸い勝手口が壊れており、紅雀の部屋まで来る  
ことが出来たが、何処もかしこも埃だらけで蜘蛛の巣の垂れ下  
がる伽藍堂になっていた。

ただ、部屋に面したこの庭だけは昔と変わらず花盛りで、手

入れもしていないのに咲いた牡丹が叢くさむらに花卉を散らせていた。  
この庭は紅雀の遊び場だった。

春は母と花を愛で、秋には生った柿を食べた思い出深い場所である。

「柿の木は……枯れちまったか」

きつと嵐か何かで折れたのだろう。木は半ばあたりでぼつきり折れて塀に寄りかかっていた。

だるさに加えて眠気も出てきた紅雀は、懐からタバコを取り出し火を灯す。

実の成る木が無かった庭に柿を植えたのは、この屋敷のかつての主だった。

フラッシュバックする着物姿。中年太りし、淀んだ目で紅雀をいつも見ていた男の姿が脳裏を過ぎる。

無邪気だったのは七つまで、それ以降の子供らしい思い出は無い。

蒼葉が鼠の死骸を見つけたらしく、おっかなびっくりに騒いでいる。

「汚ねえから触るなよ」  
柔らかな微笑の裏で、紅雀は別のことを考えていた。

——大丈夫だ。俺が言わなければ気付かれることもない。  
これからも絶対に隠し通す。蒼葉がそのことを知って離れて行くことが紅雀は何より怖かった。

懐かしい庭を前にして不安、焦燥、恐怖が心に首をもたげる。  
昏い顔で虚空を見つめ、携帯灰皿に灰を落とす。

——いや、いずれ……いずれ気付かれる……

ずつと、このままなんて有り得ない。

何故なら過去に一度だけ知られてしまったことがあるからだ。  
憎々しげに俯き唇を噛みしめる。その男は紅雀と同じく牡丹

の花を背中に彫っていた。

これ以上考えてはいけない。

今日はよく晴れた、旅行に絶好の日である。鬱々としていても仕方がないと顔を上げた途端、心臓が一つ大きく鼓動した。

「何でここ、」

声が掠れる。紅雀の眼前には自分とよく似た女が立っていた。生前と変わらず、泣けば男が寄ってくるような、しっとりとした姿に二の句が告げられず、唇がわなないた。

「お、ふくろ……」

『紅雀、よく帰って来たね。待ってたよ——……』

儂げな母の顔が挑むような笑みに変わり、腹の奥に鋭い痛みを感じて体を折る。

そしてあの夜の出来事が蘇った。  
碧島から帰還してからすぐ、紅雀は跡目としての教育を受けた。銃刀の扱いから武術、帝王学に至るまで、容赦なく叩き込まれる日々だった。

そんな息子に父親が会いに来るのは決まって夜だった。  
保護者として息子の成長を見るためとは表向きで、難癖を付けては鬱憤晴らしをするためである。

その夜も紅雀はいつもの通り、畳に正座して待っていた。  
否、本当は待ちたくなかった。

ついと薄く開いた引き戸の向こう、縁側を見る。

花々の蕾が綻ぶ優しい春も、月のない夜は薄気味悪い。揺れる木々の葉影は、救いを求めて哭く母の姿に重なって見える。

髪を揺らす隙間風は重く、畳がやや湿気ている。天気予報に寄れば深夜から朝にかけて雨が降るようだ。

すつと襖が開く。渋い和装の父親が皓々とした座敷に入ってくる。肥えた重量から歩く度に畳が揺れて沈む。

今日はどんな折檻を受けるのか、いや、自分はどんな事を言われても良い。連れ戻されてから精神を病み、病院で静養する母を思えばどんなことも耐えられる。

紅雀は眦を決し、父親と真つ直ぐに向き合った。

「その視線、生意気なあれにそっくりだ。上に立つ人間としちやあ上出来だぜ。だがな紅雀」

品定めするようにゆっくりと近寄ってくる。

「実の父親を見る目じゃねえ。もつと従順じゃなけりや困るんだよ。全くあれの言うことは碌な結果になりやしねえ。南の島

だが何だか知らねえが、故郷に戻したのは間違いだつた」

どかりと正面に座つた父親に、紅雀は静かに言った。

「俺が行つてみたいつて我儘を言つたんだ。母さんは悪くない。それに本家だつて黙認してたじゃないか」

本妻の苛めに耐えられなくなった母親は、一度でいいから生まれ故郷に帰りたいと息子に漏らした。

紅雀は幼いながらも母親を護りたかつた。泣き濡れる母の辛さを何度も訴えたが父親は全く相手にしなかつた。

益々悪化していく状況に助け船を出したのは本妻だつた。

奇しくも母の仇に救われることになつたわけだが、それも母子を厭うが故である。商才に長けた本妻は、組を支える飲食業の一手を引き受け、厄介な分家への発言力もあつた。父親は本

妻に逆らえず、数年ならばとつい首を縦に振つたのだ。

「口答えするんじゃねえよッ！」

がつと髪を掴まれ引き倒される。

「……ッ」

痛みに涙目になりながら紅雀は耐えた。父親が当り散らすの

には理由がある。分家からの茶々に加え、本妻に尻を叩かれる

毎日で心が休まらないのだ。

おそらく父親は妾の母にそれを求めていた。

柔らかな母の優しい笑顔を眩しそうに見ているのを知っている。

妾と妾腹、そして任侠の一族でなければ平凡な家庭生活を送

つていたかもしれない。

——淡い幻想だ。

現実には父親は威厳も何も無い、憐れな男だつた。

「いいかつ！ お前の代わりなんぞ幾らでも作れる！ 足元を

見るんじゃねえぞ！」

「！」

暴力に身を竦め、目を瞑る。

けれどいつまで経つても衝撃はやつて来ない。

そろりと目を開けると顔を凝視されていた。嫌な予感に身構

えた細腕に手が伸ばされる。

「お前は母親に益々似て来たなあ……生き写しつて言つてもい

いくれえだ」

腕を取り、とろりと言つた父親を見上げ、靄のかかつた顔だ

と思う。

何処か、遠い場所を見ているような、紅雀の中に何かを探し

ているような父親を見て、漠然としていた紅雀の脳裏に赤く光

が点滅する。

見たことがある。この表情は母を見る時の表情。

“女”を見る時の顔だ。

「ッ……！ 離せ！」

弾かれたように庭へ飛び出そうとした紅雀を、父親が後ろか

ら羽交い絞めにする。

すっぽりと体に収まってしまふ体格差に安心よりもぞくりと

した怖気が走る。

——誰か……！

夜は名目として紅雀の身の安全のため、金で雇ったボディガードのみを部屋の周辺に配し、あとは人払いを掛けていた。夜間、従業員達は屋敷の玄関辺りで過ごしているので奥部屋から叫んでも誰も見に来てくれない。

大きな手が円を描くように腹を撫で回し、時折衣服の中へ忍び込む。

紅雀は薄く開いた引き戸へ手を必死に伸ばした。

「い、やだ！」

触れるのは夜風だけで、ヒヤリとした感覚を指先に残すだけだった。

「お前はあれの匂いがする……。良い匂いだ」

がちがちと歯が鳴って恐怖で体が震える。

耳朶に感じる舌なめずりと獣の息。するすると帯が解かれ、腹に外気が触れる。背中からの体温と、尻に擦りつけられる硬い一物に震え上がる。

逃げたい。これから何か善くないことが起こる。逃げないと、早く部屋からこの男から逃げないと。

紅雀は肘で胸を押しやって酷く厭がった。

「やめて、くれ……。うわ！」

だが力では敵わず乱暴に反転させられて胸元に顔を埋められた。ぬるつく舌が皮膚を虫の様に這い、蛭のように吸い付く。

恐怖で巧く体が動かない。

唇を噛み締めて俯き、この善くないことが収まるのを待つしかなかった。

真昼間のような光の下、急くように服を剥ぎ取られていく。

「お前が娘だったらなあ。さぞや綺麗だったろうなあ。せめてまだ刺青のねえ柔肌を見ておきてえんだよ」

空言だ。幼い頃から父親からの愛情など無かった。それより

も愛する女を取られたことへの憎悪を感じていた。母との思い出がある座敷で横暴を働くのは当てつけなのだ。

——母さん……。

目尻に涙が浮いてくるのを上目で堪える。

思い出は綺麗なままで取って置きたかった。

縁側で、庭で。夜は座敷に布団を引き、母子で寄り添って眠った幼い頃。母の温もりと柔らかな声音で聞く童話は、安らかな眠りへと誘い、朝に目覚めて髪を梳る母の後ろ姿を眺めていた。

いつか紅雀が組長となった暁には必ず母に孝行する。好色な笑みを浮かべて見下ろす父親を見ないように顔を逸らす。

最後の下着を取り払われた紅雀は覚悟して腹筋を締めた。

「……何だ？ こりやあ」

素っ頓狂な声に目を遣ると紅雀の股間、ある一点を見つめて父親は笑みを凍り付かせていた。

「どういうことだ？！」

理解不能だと目を泳がせる表情に、紅雀は口端を上げて啜う。気付いたか。知らなくていい秘密を暴いたのはお前だ。

様を見ろ。

「どういうことか教えろ！！ てめえ、ずっと隠していやがったな！！」

一矢報いた思いから、軋むほど肩を掴まれても痛みを感じない。

紅雀は艶として邪悪な笑みを浮かべた。

「オヤジ、俺は真正銘、男だよ。だって付いてるだろ？」

「じゃあ何だよ、これはよ！」

「ッぐ！」

前触れもなく太い指を突き入れられて仰け反る。



そこは一般的なものよりも随分狭く細く、小指を入れるのがやつとの場所。後孔と男性器の間、無いはずの孔。

痛みに震える紅雀が唇を引き結んで耐えていると、孔から指がゆつくりと引き抜かれた。見下ろす父親が荒い息を整え、落ち着くように唾を呑み込む。

「刺青を彫るのは後になるがこんな孔なんぞ塞げばいい。お前には無くて良い場所だ」

ジクジクと痛む尻を強引に無視し、紅雀は父親を見上げた。

「……端から俺はこの家のものだ。好きにすればいい」

オヤジのもの、とは言わず本家と言う。それが精一杯の抵抗だった。

父親が紅雀の体から身を起こす。

「嫌な思いをさせたなあ。おめえは母さんそっくりだからなあ」

父親は一度頭に血が上ると手が付けられないほど暴れたが、気が済めば出て行ってしまおうので、こうして優しい声を掛けてくるのは珍しい。

さすがにやり過ぎたと思ったのか。それとも気まぐれか。

黙った紅雀の頭を父親が静かに撫でる。

「嫌な思いをさせて悪かったなあ。悪かった……」

父の愛情を彷彿とさせる柔らかな仕草。

けれど、違った。

「……何、をッ！」

頭を撫でる手とは真逆、片方の手が太ももを割り裂く。慌てる紅雀に有無を言わせず肥えた腹を足の間に入れた。

「嫌な思いをさせて悪かったなあ。紅雀、でもお前がちやあんと男かどうか、見極めねえといけねえ。この要らねえ孔がどんなもんか塞ぐ前に試さねえとな」

自分を見つめ爛々と輝く目に、紅雀は今度こそ全力で抵抗し

た。なりふり構わず、足をバタつかせ、父親を押し退けようとする。

けれど未発達少年と大人とは体格と壁力の差がありすぎた。簡単に腕をまとめ上げられ、腰を浮かせられれば為すべもなかった。

紅雀は力の限りに突っぱね、必死になって喚き散らす。

「母さんっ！ 母さんっ！ 助けて！！ 誰か！ 助けて！！」

嫌がる獲物を前に性欲をそそられた父親は黒ずんだ雄を取り出す。先端が濡れ始めている切っ先を、準備もしていないそこにあてがい、猫撫で声で告げた。

「なあに、ここの悦さを知らずに塞がれるってえのは可哀想に思つてなあ。これも親の優しさよ」

ぐっと腰を押し上げられて紅雀は歯を食い縛る。

「つく」

「紅雀、紅雀、俺の大切な愛し子よ」

すえた男の匂いがおぞましく体を包む。ぬるぬると孔の周囲を精で濡らし、容赦なく雄が衝き入れられた。

その瞬間はただひたすら悲鳴を上げて、首を左右に振りまくった。

生きたまま杭を打たれるような痛みに限界まで目を見開く。

「も、ひやだ、いたい！ いたいよ！ 母さん！」

何度も泣訴し、喚いて暴れる。

「うるせえ、な！」

「んぐう！」

剥いだ着物で口を塞がれる。父親が腰を使い始めると動きに合わせて血臭が漂い始める。

ただでさえ奇形で未熟な場所だ。女のそこより狭い孔はミリミリと音を立て、その度に走る激痛に全身が強張る。

挿挿する雄は猛烈な勢いで横隔膜が押し上げる。胃が刺激され、せり上がる胃液で喉がひり付いた。

「んっ、んう……！」

嫌悪と苦しさから気が狂いそうだった。今すぐに下半身と上半身を切り離したいと思うほど、腰から来る衝撃で目の裏に光が瞬く。挿挿する雄の感覚が膣から伝わってくる。突起した部分で精を塗りつけて、隘路から齎される快樂を貪っている。

「……ッは、……ッは、……へへ！」

徐々に体は痛みに慣れる。泣き疲れた紅雀は朦朧と見上げた。涎を垂らす獣の顔がある。

蹂躪されて掲げられた両足がふらふらと蛍光下で揺れている。棒のような自分の足。

こうしてみると随分細く、大人と比べれば何と惨めな体だった。逆光で影になった父親の顔を見つめ、紅雀は虚ろな笑みを浮かべた。

この場所に、本家には何処にも自分の安心できる場所がない。いつも張り詰めていて、見張られて、行動の自由すらない。それならこんな事もあって当たり前なのだ。

——この男諸共、この家が潰れてしまえばいいのに。

憎悪と嫌悪が黒い帯となって紅雀の心を縛り付ける。

挿挿を緩めることなく、泣き止んだ紅雀の前髪を掻き上げ、着物を口から外した。

「中はたっぷり濡れてるぜ？ それにッ！ その表情……、悦いのか？」

濡れるのは未発達ながらも刺激からの生理現象だ。聞いて呆れる。

「俺が孕、んだらどうす、る？」

揺すられながら釘を刺す。

「言っただろ？ お前の体を試してるんだってなあ。女か男か、どっちなのかケジメをつけねえとな」

滑稽だ、と紅雀は内心で睥睨した。自分には射精の機能はあっても月の物はない。色々と調べて分かったが、紅雀の体は男性器が強く、女性器は無機能だった。

つまり孔の先はただの空洞なのである。

「……ッは、っは！」

挿挿は早く、余裕がなくなってきたのか酷く乱暴になっていく。畳に擦れる背中が痛い。ずっずつ、と乾いた音が響くたび、擦過傷になって血が滲む。

——早く終わってくれ、もうこんな猿の顔なんか見たくもない。拒絶の一方で、体はむず痒く尻の間から何かが垂れている。

見なくても血と精が交じった禍々しいものだと分かる。たるんだ腹が腰に当たるとたびに打音が響き、否がおうにも凌辱されている現実を突き付けられる。

「中々ッ、悦、いぜ？ あれもしれっとして床じゃ淫乱だった。気が弱くなって手すら出せねえけどな！」

「んふあッ！」

体位が変わる。

軽々と起こされた体から雄が引き抜かれ、俯せにまた射し抜かれる。平たく小さな尻を鷲掴み、力任せの凌辱に畳が頬に擦れて熱を持つ。脇から回って来た手が紅雀の雄を抜き上げる。

快樂を引き出そうと萎える雄を手加減なしに弄られて、若い雄は簡単に兆した。

「なんだ、安心したぜ。元気じゃねえかよ。ほれ、出してみる。気持ち悦いんだろ？」

覆い被さり耳朶をびちゃびちゃと汚くしゃぶられる。

「……」

ふと母の名を呼ばれ、眉根を詰めた。

違う、俺は、母さん、じゃない！ そう言おうにも圧迫された体では言葉を作れなかった。

「イク、ぜ！」

ぐ、ぐ、と腰を大きく使われ、膝が畳から浮き上がるほど強く犯された。

どうでもなれ、と義務的な吐精後に紅雀は全ての力を抜く。

父親が犯しているのは自分じゃない。母の面影を持つ傀儡だと現実逃避する。

「っふー」

しつこく腰を打ち付け、長い放精を終えた父親が雄を引き抜く。大きく息を継いだ後で、犯した体を仰向けにし、白濁の散った体をうっそりと眺めた。

「刺青を入れる日を彫り師に相談しねえと。その前に手術の日取りか」

抜け殻のような紅雀の体をなぞり、びたりと腹の上で指先を止めた。

「だがそれまで……、おめえが母さんの代わりをしてくれるんだらう？ この要らない孔だよ」

「ッ！」

新しいおもちゃを見つけたように我が子を見つめ、体に再び凶悪な杭を打つ。

手術までの数週間、毎晩そうして犯された。手足に枷を付けられ、悦いと言うまで喘がされた夜もある。

胎の中に入った精はおもちゃのようなものだった。

一時の戯れ、快楽、そんなくだらない一過性のもの。

今夜も大輪の牡丹が咲き誇る背中に押し倒されて、意識がなくなるまで犯される。

「あ……、んっ」

レイプされているのにも関わらず、体は快楽に正直で、弄られるたびに淫らになっていく。

逃避していた意識は、いつしか欲望を追うようになる。当然のように布団が引かれた部屋で父親から服を剥かれる。

今夜は随分酔っているらしく、重ねた体は発汗していて酒の匂いが漂う。

明日は体に墨を入れる日で、この行為もようやく終わりを迎える。この日をずっと待ち望み、耐えてきた。

それなのにおかしい。

「そこ、もつと……突い、て。ッあ！ ひあ！」

体は痺れるように甘く、泥のような熱に嵌り始めている。

濡れたそこはすっかり父親の雄の大きさを覚え、容易に開き、銜え込む。両腕を抑えつけられ、揺れる影はゆりかごのようにゆらゆらと畳に落ちていく。

陶然とする耳元で卑猥な言葉を求められ、大人しく従ってしまふ。

「あ、イク……出ちゃう！」

紅雀は分厚い背中に手を回し、声を枯らして喘ぐ。

一方でそんな自分を何処か別の世界から見て自嘲する。

結局、獣の子は獣。

そして獣の子は情けすらかけられない。

与えられる悦楽に、紅雀は我を忘れそうになる。肥えた腰を重く打ち付けられながら、紅雀は諦観して揺れる細い腕を伸ばす。

天井から釣り下がる白色灯の光へ。

母を護る。

けれど自分は？

母は自分を護ってはくれない。誰も守ってくれない。無味蒙昧な世界でただ一つ、青い灯が見える。淫獣となった紅雀を本来の自分へと戻してくれる。

その光はいつも紅雀と共に在り、己が確かに存在すると勇気づけてくれた。

——俺を導く、大切な……光。

「紅雀！」

はっとして振り向くと蒼葉が腰に手を当てて立っていた。

「聞いてるのかー？　つか何だよ、怖い顔して」

「……昔のことだ」

「どうせまた嫌なことだろ？　しよがねえな」

蒼葉は縁側から降りて手を差し出す。

「お袋さんの墓参りのついでに寄ったんだし、折角本土に来たんだから、何か美味しいもんでも食べに行こうぜ！　腹も減ったし！」

「それなら、近くに美味しい寿司屋がある」

食いに行くか？　と言うと蒼葉は満面の笑みで奢り？　と笑う。

紅雀は苦笑し、差し出された手に手を伸ばす。

辺りは爛漫として鮮やかな庭。

過去を思い出す必要はない。棄てられたことなど蒼葉との未来を想えば忘れられる。

紅雀は立ち上がり、愛しい人の手を取ろうと手を伸ばす。

二人の間に生温い風が流れる。いつか見たゆりかごの影が、ゆらりと揺れた気がして横を見た。

気のせいかな？　紅雀は腹に手を置いた。

足の間、手術痕は綺麗に均され、やや凹みを残すだけ場所から何かが流れてくる。粘着質でとろみのある液体……。

ふと自分の足元を見た途端、腹に鈍い痛みが襲い掛かる。庭に散る、赤い花びらよりも赤いモノ。

腹の中で何か、果実のようなものが育つ感覚。

塞いで、忘れて、無かったことにした、いつかの本能。体から血の気が引いていく。絵の具を混ぜたような色彩で景色がぐるぐると回り始める。

『もう隠さなくていいんだよ、紅雀。その子には隠さず話していい。お前は私の子、そして私と同じ』

融解する赤と緑の世界で、いるはずのない母がこちらを見て立っている。

『お前は分かっている。しっかりと覚えてるんだらう？　あの時の感覚を……』

あの法悦を。

犯されたことよりも、その快楽の壮絶さを。

「ああ、覚えているぜ……。しっかりと」

——ああ、ここに“男”がいるじゃないか。

体が疼く懐かしい感覚に、紅雀は蕩めいた表情を浮かべる。それは“女”のように嫵やかで妖艶な笑みだった。

回る回る世界が回る。

極彩色に塗れた意識の中で、赤い色だけがやけに浮いて見える。

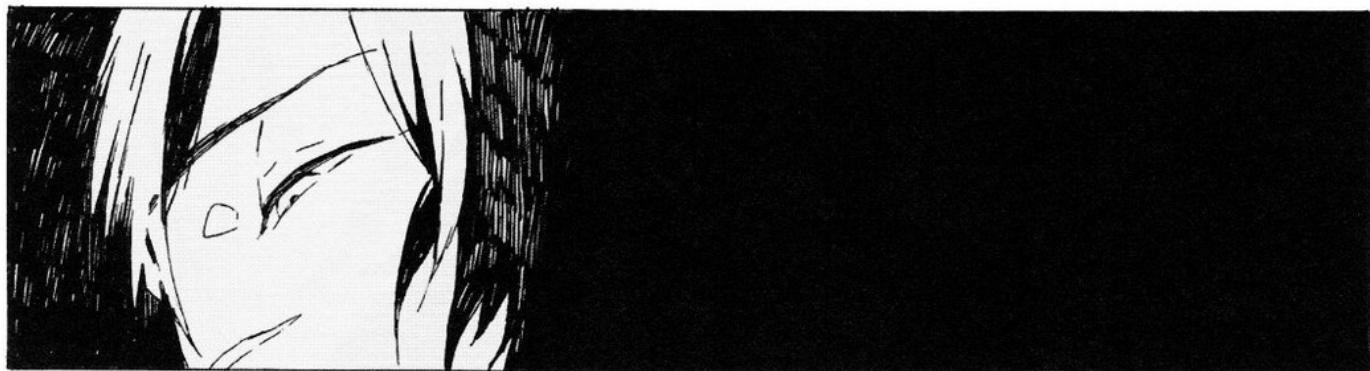
ふわりと体が解き放たれる。

愛しい男の悲鳴の中で、紅雀は恍惚と庭に崩れ落ちた。



かいたひと 東吉彦

この、この、人喰い!



何だと?



喰った、喰ったな  
あの狐を

しかし  
あいつは  
悪い奴だ

そうだな

お前は  
俺と  
同じだ

同じ…？

己を使い

慈悲もなく

数多の武装を  
得る前の

慈悲を受けても  
なお

いや  
俺とも  
同じだ

# 俺

根本は

醜く

荒々しく

変わらぬ

お前は

俺達と同じだ！







また

お前らか……!

毎晩  
現れて  
俺の頭の中を  
かきまわし

やが……

あ  
!!!

何  
夢なら醒めろ  
みてえなツラ  
してんだ


これは  
夢じゃねえんだよ

今日こそは  
返事を  
いたたくぞ

俺になるか

それとも  
俺になるか

……るせえな……



俺はもう  
白には戻れねえ

けど

お前らの  
どっちにも  
ならねえ

解ったかよ…

クソ…野郎…!

お前に  
武器はあるのか？

これから  
得るのか？

よもや  
捨てるか？



さあ  
またあした

どう足掻こうが

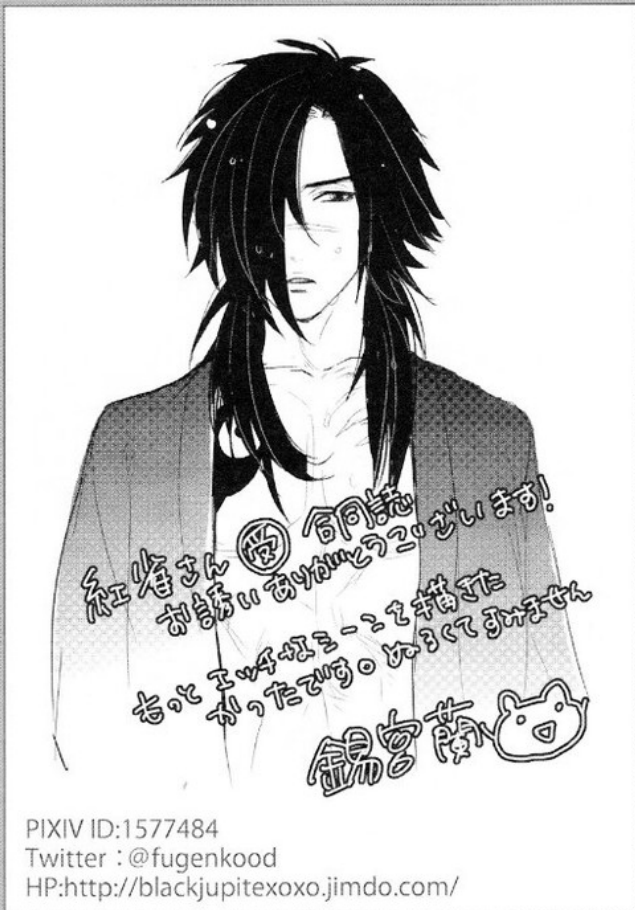
お前に血は  
既に

流れている

こ め ん と か っ と

# コメント カ ッ ト

COM M E N T C U T





紅雀受合同誌発行おめでとうございます  
 こんな…こんな、求め続けた夢の様な合同誌にお誘い頂き  
 ほんとうに…ありがとうございました…  
 紅雀さんを困らせるのが大好きです  
 まつ



受雀さん合同誌ご発刊、  
 おめでとうございます！

お招き頂きまして光栄でござい  
 ました。受雀さんを書くなら  
 近親相撮ネタで「少年紅雀を描  
 きたい！」と心に決めておしま  
 したので、書くことが出来て  
 楽しかったです！

今より皆様の毒敵なお話を  
 拝読させて頂くのが楽しみです。  
 有難うございました～！

PixivID:2556570

ikuri ナルカ 拜

この度は紅雀受け本  
 発行おめでとうございます!!

みなさまの紅雀さん  
 受け作品が拝見  
 できるのが今から  
 楽しみです♡♡♡  
 もっと広がり  
 紅雀さん受けの  
 輪♡♡♡♡



Twitter:aomutu9696

Pixiv ID : 3662746

主催：東吉彦



## 紅雀盛（仮）

2014/05/03  
DRAMAtical Murder goudou hon  
koujyaku uke

発行代表者：**大快走**（東吉彦）

info@dks.noor.jp

pixiv:649433

twitter:azyos

印刷：株式会社栄光

禁：無断転載複製複写

（一般の方の目に触れる恐れのある場への出品、  
オークション含む）

本書の執筆者掲載は全て  
敬称略とさせて頂いております。

